



長浜曳山の能面

はじめに

羽柴秀吉が長浜城主であったころ、男子の誕生したことを喜び、その祝いとして城下の町衆に金子をふるまったという。その金子をもとにしてつくられた曳山を、八幡宮の祭礼に城下町をひきまわしたことはじまったのが長浜曳山祭であると伝えられている。この曳山祭そのものについては、すでに文化財教室シリーズ [37] で詳しく紹介されており、ここではそれにゆずることにしたい。

さて、12基の曳山それぞれに1面ずつ能面が保有されている。ただし、これらの能面は曳山祭のはじめからあったわけではない。文政8年(1825)11月、井伊直中(1766~1831、直弼の父、当時の彦根藩主は井伊直亮)は六十の賀(60歳のお祝い)を榎御殿で催したのである。そのとき宮町組と大手町組は曳山を解体し、彦根まで湖上を船で運びこみ、直中に12組の狂言を演じて見せたのであり、その返礼として直中から各山組に能面が1面ずつ与えられたのであった。それまでは山組の名称を「何町組」としていたが、「何々山」というように現在の呼称に固定するようになっていったのは、この与えられた能面にちなんでいる。

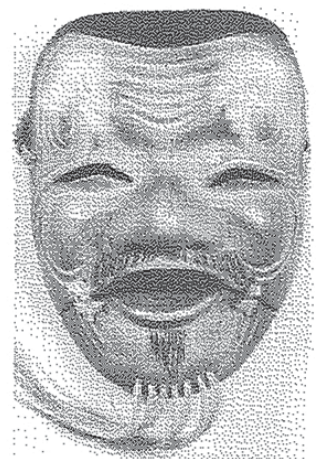
翁面と三番叟

12基の曳山に与えられた能面は表にあらわした12面である。まず翁系の面からみていくことにする。伊部町組(翁山)の翁面、瀬田町組(万歳楼)の三番叟がそれである。「とうとうたらり」の謡ではじまる翁舞は、特別に神聖視された儀礼的なもので、「能にして能にあらず」といわれている。能楽が大成さ
1983. 10. 31

れる以前の姿をあらわしており、したがってそこで用いられる仮面の成立も古い。史料によって確かめられるのは弘安6年(1283)の段階であり、翁舞に使用される4種の面がすでにそろっている。4種の面とは、翁面・三番叟・父尉・延命冠者のことである。世阿弥のころになると、露払(今は千歳)・翁・三番猿楽の式三番となり、父尉と延命冠者の2面は特殊な演出の場合にのみのみこされることになったのである。千歳は仮面をつけない置面の若者であるから、曳山に翁面と三番叟の2面が与えられたのも、こうした背景があったからである。

伊部町組(翁山)の翁面は白肉色に塗られた白色尉で、やや面長となる。上縁には冠形を造り出し、黒色としている。額にはぼうぼう眉をつけ、眼はへの字に刳り抜いて笑みをたたえ、額や頬には翁面通有の皺を刻んで、下顎は口裂の線に沿って切りはなされた切顎となっている。全体に肉厚となり、鼻下や唇下のひげの毛描は稚拙さが目立ち、彩色もやや劣っている。面裏に「御歳八十六才 鈴木安昌打之」との朱書があり、能に心得のある鈴木安昌なる人物が翁面を模作したのであろう。

瀬田町組(万歳楼)の三番叟は黒く塗られるところから黒色尉とも黒式尉ともいい、式三番のいちばんのちに登場し、鈴



伊部町組(翁山) 翁面

の段で種蒔きの所作を舞う。三番叟は翁のもどき役で、これだけは狂言方が受け持つことになる。翁面より小ぶりにつくられ、眉やひげは粗い植毛となる。翁面とほぼ同じ工作になるとはいえ、柔和な老相を示す翁面に比べ、粗野な表情にあらわされ、いかにも田夫野人の趣に富んでいる。万歳楼の三番叟は直中のころに打たれた面と考えられる。

鬼神系の面

能面史上において、翁系の面に続いて成立したのは鬼神系の面であり、曳山の能面の中では神戸町組（孔雀山）の猿飛出、本町組（春日山）の黒鬚、北町組（青海山）の鼻瘤悪尉、田町組（月宮殿）の驚鼻悪尉がそこに分類される。

ここでいう鬼神とは、たんに地獄の鬼というだけでなく、怨霊や憑物の鬼なども含めており、超人間的な能力をもつものを意味しているのである。すなわちこうしたものを演ずるには仮面はどうしても必要であったといえよう。南北朝時代の記録にも田楽や猿楽で鬼の面をかけていたことが載っている。

世阿弥の時代には後世の能面のように面の名称は十分に定まっていなかったのだが、『串楽談儀』に鬼神系の面として飛出・天神・大癒見・小癒見をあげている。このうち飛出と天

神は口を大きく開いた阿形につくられ、大小の癒見は口を一文字にへしませた咩形となる。鬼神系能面は阿形・咩形のいずれかに分かれ、『二曲三体人形図』（金春禅竹写し）によれば、碎動風の鬼は阿形の飛出系の面を着け、力動風の鬼は咩形の癒見系の面を着けている。こうした鬼神系能面の作者として世阿弥は近江猿楽の赤鶴を名手としてあげている。

さて、曳山の4面はともに阿形であり、天狗や地獄の鬼として用いられる癒見系の面を見ることができない。神戸町組（孔雀山）の猿飛出は赤褐色に塗られ、くぼんだ眼窩いっばいに金銅板を嵌めている（飛出の名は、この眼球が飛び出していることによる）。眉・ひげなどを毛描きし、歯には金泥を塗っている。面裏の額部は横にノミ目がのこり、鼻裏には縦に6条のしらせ鉋がある。相当使われた跡があり、江戸時代初期の作であろうと考えられる。曳山の能面の中では良作に属す。ちなみに、猿飛出は「鶴」の専用面で、この能は『平家物語』の頼政による鶴退治を素材としたものであり、鶴の姿は「頭は猿、軀は狸、尾は蛇、手足は虎の如く」という。

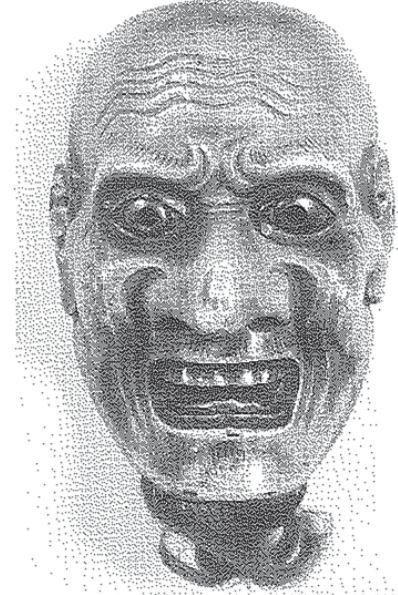
本町組（春日山）の黒鬚は脇能の働物「竹生鳥」をはじめ、竜神の役にひろく用いられる面である。大飛出から変化してできた面で、



神戸町組(孔雀山) 猿飛出



北町組(青海山) 鼻瘤悪尉



田町組(月宮殿) 驚鼻悪尉

大きくちがうのは眉の下が眼にかぶさるようにたれ下がり、瞳の打抜きがやや上むきとなること、さらに耳を造り出さないことである。ふつう黒鬚は代赭色に塗られ、眉やひげを墨で毛描きしたものであるが、本町組の黒鬚は肌を金泥彩としており、泥黒鬚と呼ぶべき面である。この面は井伊直中のころに打たれた新作面であろう。

北町組（青海山）の鼻瘤悪尉は、鼻が瘤状になっている悪尉のことであり、ここでいう悪尉とは、たけだけしく強い老人、恐ろしげな老人との意味である。黄味がかかった肉色の肌に、額には血管を浮び上がらせ、眉根を寄せてV字状の刻みを強く入れ、眼球いっばいに金銅板を嵌め込んでいる。鼻翼をひろげ、頬の筋肉を緊張させており、わずかに開けられた口の上歯列にも金銅板をかぶせている。口ひげ、顎ひげにはたっぷり植毛し、まことに異国的な恐ろしい顔つきをしている面である。異邦人や明神などが主人公となる脇能の楽物（舞楽をかたどった舞）の後シテに用いられる。この鼻瘤悪尉の面裏は浅い横ノミ目でととのえられ、鼻裏に縦に入れられたノミ目はやはりしらせ鉋であろう。江戸時代初期の作である。

田町組（月宮殿）の驚鼻悪尉は江戸時代も中期ころに打たれた面と考えられ、鼻が驚鼻のようになっている。鼻瘤悪尉よりもおとなしく表現され、眼球も小さくなって金銅環を嵌めるが、眼の両側に朱を入れ強さをあらわしている。植毛も顎ひげだけで、口ひげは墨毛描きとなっている。悪尉という面の名称は世阿弥のころからあるほど古く、のち鼻瘤悪尉や驚鼻悪尉などの変わり型を生じ、悪尉は大悪尉と呼ばれることになる。大悪尉には観世型と宝生型の2種あり、観世型から鼻瘤悪尉、宝生型から驚鼻悪尉がつくりだされたのではなかろうか。悪尉をいわゆる尉に分類するか鬼神の中に入れるかは意見の分かれるところであろうが、ここでは後者と考えた。

尉の面

鬼神系の面とほぼ同じころ、あるいはやや遅れて成立したのが一般的な尉面である。尉は男の老人のことだが、神が老人の姿を借りてあらわれたものである。

呉服町組（常盤山）と宮町組（高砂山）にある尉面は小尉という。「高砂」「弓八幡」など脇能物の前シテに用いられる面であり、柔和な品格の高い尉面である。高砂山の小尉は口下のひげも植毛となるなど常盤山の小尉と多少工作の異なるところがみられ、品位もやや劣っている。常盤山の小尉の面裏には額中央に「満永」と刻まれ、その下に花押を焼印によってあらわし、墨を埋め込んでいる。満永は越前出目家の四代目にあたり、以後代々元



休と称したことから満永を古元休と呼んで区別している。居を江戸に移し、寛文12年(1672)に没している。しかし、残念ながら常盤山の小尉面は満永の打ったものとは思われず、古元休作面を模作したものと考えられる。その時期は直中のころからあまり遡るものではなかろう。高砂山の小尉もほぼ同時期に打たれた面である。

大手町組（寿山）の能面は石王尉であるという。南北朝から室町時代の面工であった石王兵衛の創作したところからこの名が付けられたと伝える。眼がくぼみ、独得の渋さのある尉面である。

小面と猩々

能面における男面・女面もこれまで述べてきた面同様神性・靈性を帯びており、現実の男女に扮するのではなく、過去の亡霊をあらわすことが多い。室町時代の女面を見ると、現在通行の面よりはるかに神秘的な妖しさをたたえている。私たちが抱いている女面の型



魚屋町組(鳳凰山) 小面 御堂前町組(諫鼓山) 採桑老

が吹き上がるのは室町時代も末のころになってようやく完成するのである。

魚屋町組(鳳凰山)の^{小面}はやや下ぶくれの豊かな頬をもち、若い女面の代表的なものである。額中央で髪は左右に分かれ、髪際に三本の毛筋が平行して描かれている。この髪部には補修のあとがあり、面裏も一度削り直されているようである。このことは演能に用いられることの多かったことを物語っている。江戸時代初期の作とみてよいだろう。

船町組(猩々丸)の^{猩々}は全面赤く塗られ、額一面に髪が毛描きされる。中国の伝説上の

獣で、人に似た酒好きの妖精が猩々である。

「猩々」という天下泰平をことほぐ祝言の能の専用面として用いられ、能面の中では笑相を示す数少ないもののひとつである。江戸中期の作とおもわれる。

おわりに 一御堂前町組の採桑老一

これまでみてきた能面は、すべて江戸時代の通行の能面であった。たんに曳山の能面というばかりでなく、井伊直中から与えられたものであるから、井伊家に所蔵される能面の全体像をさぐる上からも重要な能面といえよう。ところが、御堂前町組(諫鼓山)に与えられたのは能面ではなく、舞楽面の^{採桑老}である。何故ここに舞楽面が入っているのかその理由は不明としかいいようがない。この採桑老は白肉色で、眉・ひげを植毛し、両眼は別材で動眼、顎を切顎とする通有の作である。面裏は平滑にして黒漆を塗り、そこに「出目備後大掾平満喬(花押)」の金泥銘がある。^{満喬}(洞白)は正徳5年(1715)没の大野出目家四代目に当る面打師である。江戸時代に舞楽面を能面の作者が制作していたことを示す好資料といえよう。

(佐々木 進氏提供)

曳山の能面一覧表

曳山組名	曳山町名	面名称	面長	面幅	面奥	備考
翁山	伊部町	翁	19.7	15.1	8.3	
寿山	大手町	石王尉				未調査
常盤山	呉服町	小尉	20.7	15.5	8.2	
孔雀山	神戸町	猿飛出	20.7	15.7	10.2	
春日山	本町	黒鬚	20.5	14.5	9.7	
青海山	北町	鼻瘤悪尉	20.4	16.1	10.6	
鳳凰山	魚屋町	小面	21.5	13.7	6.9	
諫鼓山	御堂前町	採桑老	20.2	15.2	8.7	舞楽面
月宮殿	田町	鶯鼻悪尉	21.5	16.4	10.7	
猩々丸	船町	猩々	20.9	13.2	6.9	
高砂山	宮町	小尉	21.0	15.7	8.5	
万歳楼	瀬田町	三番叟	17.9	13.1	7.3	